
出会えた奇跡を

鈴夜 音猫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

出会えた奇跡を

【Zコード】

N6133L

【作者名】

鈴夜 音猫

【あらすじ】

『嫌い嫌いも……?』の雅の親友、桜の物語。

前に投稿していたのを書き直しています。

前回の内容から大幅に変更があります。新しい作品としてお楽し
みください。

第一章

あなたにはきっと理解らない

「ねえ、桜の彼氏ってどんな人？」

とある昼休み。

唐突な親友、雅の問いかけに私は卵焼きを食べようとした体制のまま固まつた。

今、私達がいるのは人も疎らな中庭の隅っこ。

担任に呼び出しを食らつた雄大がいないため、一人でお弁当を広げてる。

「……何、突然」

「今まで聞いたことなかつたから」

いや、確かに話したことないけど突然すぎでしょ。

そう突つ込みたくなるのを卵焼きと一緒に飲み込んで、イチゴミルクを飲む雅を見つめた。

今まで全くと言つていい程、雅は恋ばなとかに参加しない子だった。

あのバカ雄大のバレバレな態度にすら、気付かなかつた程の鈍感さん。

まあそこが雅の可愛いところなんだけど。

そんな雅に今みたいな問いをされたのは今日が初めてで。
私は正直戸惑つてしまつた。

「知りたいの？」

雄大と付き合い出したからだろ？
雅の脳内は最近ピンク色らしい。

私の問いかけにものすごい勢いで頷いている。

「ん……ないしょ」

「えへへ！？」

雅が抗議の声をあげるけど、軽く無視してお弁当を広付けた。

「ごめんね、雅。

まだちょつと話しひらいんだ。

私はむくれてしまつた雅の頭を撫でながら、心の中で謝つた。

学校からの帰り道を、いつもとは違い、一人で歩く。

家が近いこともあって、いつもは雅と雄大と私の三人で帰っていたんだけど。

「あれは笑えた……」

学校でのことを思い返し、私は思わず笑ってしまう。

誰に言われるまでもなく、一人が付き合いで出したら私は別に帰るつもりだった。

だつてわざわざ一人の邪魔するようなことしたくない。

けれどそこで鈍感、雅の真骨頂が垣間見えることになる。

なんと私にも一緒に、つまり今まで通り三人で帰ろうと彼女は言い出したのだ。

「あの雄大の顔つたら……」

あからさまにオロオロし出す雄大に私は笑いを堪えるのに必死だった。

そして痛いお腹を押さえながら、用事があると嘘をつき、雅を宥めたのだ。

「まあ雅らしいんだけど」

今まで色恋について全く関心を示さなかつたくらいだ。

これくらい当然といえば当然のこと。

しかし、ここまでもくると少し雄大が可哀想になつてくるナゾ。

「でも私が言うとお節介だしな……」

どうしたもんか……

道を歩きながら考えていると、背後からクスクスと低い笑い声が聞こえた気がした。

「……つ？ー」

訝しげに振り返った私は、そこにいたスーツの男性の姿に絶句する。

「……清貴さん」

「偶然だね、桜ちゃん。今帰り？」

清貴さん　この人が社会人二年目、六歳年上の私の彼氏。

「……いつから？」

「結構前からかな。桜ちゃんの百面相、可愛かつたから声かけるの躊躇つてた」

……見てたなら、さうと声かけてくれたら良かつたの。」

「……意地悪っ」

「意地悪な俺が桜ちゃんは好きなんでしょう?」

「うう……」

「葉を詰まりせた私を元を寄せて、清貴さんは私の肩に手を回すとそのまま歩き出した。」

「……」と楽しげな清貴さんにムカついてくる。

でも大きな抵抗も出来ずに、私はまんまと彼の腕の中へと捕まつたのだった。

「桜ちゃん、そこ違つよ

「え？」

必死になつて問題を解いてるし、清貴さんの長い指がノートの一角をトン、と呂いた。

「……あ」

清貴さんの指先が指示する問題を見つめ、やつと計算間違いを見つける。

今日はこれで四回目。

私はため息混じりに問題の解き直しにかかった。

学校終わり、両親共に海外にいる私は、独り暮らしじてするマンションに帰る。

そして、両親からも私の保護者の役割として認められている清貴さんには勉強を見てもらつてこりのだ。

「疲れた? ちょっと休む?」

言つが早いが、清貴さんはキッチンへと消えていく。

何度も家に来てる清貴さんはもつ慣れたもので、あつとこいつ聞こコーヒーを用意してくれた。

「ありがとうございます」

私用の桜の花が描かれたマグカップにはブラックのコーヒーが湯気をたてていた。

「どういたしまして」

対して清貴さんの青いマグカップには砂糖たっぷりのカフェオレ。

「……美味しいの？」

「……」ことカフェオレを口にする清貴さんに思わず聞いてしまう。

甘いのがダメな私としては、砂糖たっぷりのカフェオレなんて飲めたものじゃないんだけど。

すると、清貴さんは大きく頷いた後、私に聞き返してきた。

「桜ちゃん、よくブラックなんて飲めるね」

「だつて……コーヒーは苦くないわ」

苦いのがコーヒーの良いことじやが。そう思つてゐ私には、コーヒーは苦ければ苦いほどいいのだ。

けど、反対に甘くないと飲めないと、清貴さんには理解されないけど。

二人して互いに首を傾げながら、私達はいつもの他愛ない一時を過ごしていた。

第四章

清貴さんと初めて会つたのは高校受験を控えた中学三年生の時。私の家庭教師として彼はやって來た。

初め母は、私の友達のお兄さんに家庭教師をお願いした。

けどそのお兄さんはすでに家庭教師を掛け持ちまでしていく、代わりに、と来たのが清貴さんだったのだ。

友達のお兄さんを信頼して頼もうと思つていた母は最初、断るつもりだつたらしい。

けど清貴さんの柔らかい雰囲気と、教えてもらつた私の反応からお願いしてみようといつことになった。

清貴さんの教え方はすぐ分かりやすくて、私はすぐ家庭教師の時間が好きになつた。

清貴さん曰く、

「ヒントさえあれば桜ちゃんは一人でも頑張れる」

とのことだけど、そのヒントが的確に出来る清貴さんがすごいのだと思つ。

「教師になるの?」

一度だけ、そう尋ねたことがある。

すると清貴さんはフツと笑つて

「なりたても、今は需要がないから」

と、少し悲しげに答えてくれた。

そのどこか寂しそうな、でも優しい微笑みにイチコロだつたんだ。

けど、当時は清貴さんも学生だったとはいえ、私は中学生。

まだまだ子供の私なんか相手にされないだらうって、高校受験を終えて家庭教師が必要なくなつてからはずつともなかつた。

転機が訪れたのは高校二年の夏。

雅達と遊んだ帰り道。

スース姿で公園のベンチに座る清貴さんを偶然見つけた。

「お久しぶりです」

そう声をかけると、一瞬驚いた顔をして、でもすぐあの時と変わらない優しい目をしてくれた。

それから勉強を見てもらひ、とこつひとつで度々会つよつになつた。

告白をしたのは高校三年にあがる直前。

玉碎覚悟だったんだけど、清貴さんは優しい笑顔で

「うううううううううう

と言った。

それから約2ヶ月経った今、私はまだ半信半疑でいる。

どうして清貴さんは私の告白に感じてくれたの？

あなたから見て、私はまだ子供なはずなのに。

決して埋まらない年の差は素直に喜ぶ気持ちを奪っていく。

あなたにとって、私はちゃんと”恋人”ですか？

「桜、携帯……メールみたいだよ？」

机に突つ伏した私に、雅がそう言ひて声をかけてきた。

「いいの。どうせメールマガだから」

顔も上げずそう答えたけど、違つて分かつてゐる。

メールの相手は清貴さん。

勉強を教えてもらつた日から一週間。

私は彼との全ての繋がりを絶とつとしていた。

あの日。勉強を中断して間もなく、清貴さんに電話がかかってきた。
相手は仕事の取引先の人らしく、急ぎ確認したいことがある、とい
う呼び出しの電話だつた。

仕事なんだから仕方がない。

何度も謝つてくれる清貴さんを半ば追い出すように送り出して。
ドアが閉まつた途端、私は泣き崩れた。

苦しかつた。

本当は”行かないで”と叫び出したかった。

でもそんなことしたら嫌われてしまうかも知れない。

彼は社会人で、私は学生。

ただでさえ年の差に苦しい想いをしてるのに、住む世界すら違う。

そのことを突きつけられた気がした。

「ねえ、帰りにカラオケ行かない？」

放課後、席を立つと同時に雅がそう言つてきた。

見れば、雅の後ろで雄大が小さく頷いている。

「久しぶりに桜の歌、聞きたいの。だめ？」

私の手をギュッと握つて、首を傾げる雅は可愛い。

私にはない、女の子の部分。

「うん……そうね。久しぶりに行こうかな」

気分転換にはいいかもしない。

雄大も構わないみたいだし、今日は思い切り楽しもう。

そう心に決めて、私は雅達と歩き出した。

「……大丈夫か？」

先を行く雅の後にゆっくりと続きながら、私の隣を歩く雄大が口を開いた。

「うん、心配かけてごめん」

雅や雄大に気を使わせてしまって、私の状態は酷かつたんだろう。

「何があつたか知らないけどさ、俺らは桜の味方だからな」

「……うん」

いつもは頼りない雄大だけど、友達想いなやつだから。

力強い言葉に荒んでいた心が少し軽くなつた気がした。

お礼を言おう、と雄大を見上げた瞬間、私は別のものに気をとられ立ち止まつた。

「……桜？」

動かない私に気付いて、雄大もちょっと先で立ち止まる。

けれど、雄大の問いかけに答える余裕は私にはなかつた。

「な……んで……？」

私の視線の先にいたのは紛れもなく清貴さんだつた。

しかも、綺麗な女人と一緒。

一人は私になんか気付くはずもなく、とあるお店の前で楽しげに談笑している。

……ああ、やっぱりか。

自分のバカさ加減に嫌気がさし、私は乾いた笑みを浮かべた。

「桜……？」

「…………めん、やっぱ帰るね」

心配そうな一人に向けた精一杯の笑顔。

そして私は逃げるようにその場から走り出した。

後ろで一人の声が聞こえた気がするけど、もつ頭の中はぐちゃぐちや。

全てのことから逃げ出したくて、私は無我夢中で人混みの中を走つていった。

あの後、どこをどう走ったか全く記憶にないけど、ちゃんと家にはついた辺り、まだ脳はまともなのかもしない。

けど心はボロボロで。

顔も情けないほど涙でぐちゃぐちゃだった。

ふらつく足でなんとかベットに辿り着き、力なく倒れ込む。

意思とは関係なく溢れ出る涙を布団に吸わせ、私はじっと宙を見つめた。

甦るのはさつきの光景。

信じていた。

いや、信じていたかったのに。

見てしまった光景は、いとも簡単に私の心を打ち碎いた。

信じたくなかった。

あれが真実なら、彼には私じゃない恋人が他にいたということ。

……いや、そもそも私は彼の恋人だったんだろうか。

私はそう思っていたけど、彼には単なるお遊びだったのかもしれない

い。

舞台にいたのは私だけ。

一人で踊つていただけの、愚かな道化人形だったんだ。

「……バカみたい」

あの人は大人なんだから、私みたいな子供を相手にするなんて有り得なかつたんだ。

そんなことにも気付かないなんて、本当バカみたい。

（　）

ふいに携帯が鳴つた。

清貴さんかと思つたけど、ディスプレイに表示された名前は違う人だった。

「……はい……いえ……え？……分かりました」

用件だけ聞いて切つた電話。

もう何もかもどうでも良くなつて、私はそのまま携帯の電源を落とした。

翌日。泣き腫らした私の顔は酷いものだつた。

本当はもう何もする気が起きなかつたんだけど、そういうわけにもいかない。

とりあえず顔を洗い、薄く化粧をする。

そしてどうにか下がつた気分を上げよつと、お気に入りのワンピースに着替えた。

まだ肌寒さが残るため、薄手のカーディガンも羽織る。

そして心配しているだろう雅に、家の電話からかけた。

携帯の電源は切つたまま。

どうしても電源を入れる気にはならなかつた。

「じめんね、雅……うん……ちょっと具合悪くなつてた」

雅には軽く事情の説明をする。

と言つても、清貴さんの話はしなかつた。

「あ、今日はちょっと……実はね……」

今日改めて遊ぼうと誘つてくれる雅に、私は今日のこととを簡単に話した。

そしてあらかた話終えた時、玄関のチャイムが鳴った。

「はい…………お久しぶりです」

雅との電話を終えて玄関のドアを開けた私は、そこに立っていた人物にそう挨拶した。

「やだわ。何でそんな他人行儀なの？」

呆れたように笑う、かつちりとしたスーツに身を包んだ女性。

そして昨夜、私に電話してきた人物こそ他でもない、この私の母だった。

実はとある企業の社長である父と、その秘書である母。

海外に本社を置いているため、なかなか帰つてくることがない人達が、日本に来た理由は一つ。

私のお見合いだつたんだ。

別に父のことも、母のことも、決して嫌いではない。

けど高校生になってから、格段にお見合いの回数が増えたのは少なからず迷惑なことだつた。

父にとつては仕事の付き合いだし、無下にできないのは分かるんだけど。

年に四回はあるお見合いにもう慣れてしまつたとはいえ、やっぱり嫌なものは嫌。

今、父と相手の父親は楽しげに談笑している。

……いや、腹の探り合いといつべきか。

笑顔なのに田が笑つてないもの。

「一人で散歩でもしてきたり？」

二人の攻防戦に危機感を感じたのか、母が私達にそう言つてきた。

正直、相手の人と二人きりも嫌なんだけど、暗雲が立ち込めてるの
は確か。

私は気が付かないよつ溜め息をつき、席を立つた。

「桜さんは高校三年生でしたね。大学はやはりアメリカに？」

手入れの行き届いた庭を歩きながら、声をかけてくる男の人。

にこにこと微笑む彼に私は作り笑いを浮かべる。

「アメリカは苦手なんで、できれば日本でと思つてます」

「ですがやはり名門校を受けられるんですね？庶民と一緒に、といつのは耐えられないでしょ？」

今、大学一年だといつその人のその言動に、顔に貼り付けた笑顔が引きつりかかる。

なんという金持ち的考え方。
理解できない。

「そんなことはないですよ。現に今の高校には金持ちとか庶民とか、そういう考えはありません」

つていうか今さらそんな昔気質な」と、父ですら言つたことはない。

「桜さんは優しいな。まさに私の妻に相応しい」

……はい？妻？

相手の言動に私は思わず立ち止まる。

私は断る気満々なんだけど、どうやらこの人はそういうじゃないらしい。

……ヤバイかも

「優しくなんてないですよ、私は」

「その謙虚な姿勢も私好みです」

ああ、逆効果みたいだ。

どうやら人の話を聞かない、自分本意な人らしい。

私が一番苦手とするタイプ。

「私は欲しいものは必ず手に入れる主義でね」

「え……ちょっと……」

後退りする私を捕らえようとする手。

その手から逃れようとした私は、背後から伸びた別の手に捕まつた。

「なつ……なんで……？」

「桜ちゃん、大丈夫？」

そこには荒い息を繰り返しながらも私に微笑む清貴さんの姿があつ

た。

「桜?！」

街中の喧騒に紛れて、しかししつかりと俺の耳に届いた聞き覚えのある名前。

ハツとして声のした方を見れば、桜ちゃんと同じ制服を来た男の子と女の子がいた。

「清貴さん?」

横から怪訝そうに俺の名前を呼ぶのは仕事の関係で一緒にいた女性。取引先の社長の娘さんで、帰国子女らしく街中を案内するところを目だが、いわば軽い見合いだ。

適当に付き合つて帰らうと思つていたけど、何かただならぬ雰囲気の彼らが気になつた。

「すみません、俺、用事があるので」

「え? ちよつと...」

呼び止めよつとする女性を尻目に車道を走り抜け、桜ちゃんの知り合いらしい一人に声をかけた。

「「めん。君達、桜ちゃんの友達?」

「え？ せつですか？」

近くにいた女の子が先に俺に気付いた。

小首を傾げる可愛い仕草にいつか桜ちゃんに聞いた名前を思い出す。

「もしかして、雅ちゃんかな？」

「あんた誰だよ」

「ちよ…… 雄大！」

女の子に話しかける俺の前に立ちふさがり、男の子は彼女を背後に隠そうとしている。

「突然」めん。俺は……

「ちよっとー何なのーー！」

彼に説明しようと口を開きかけた時、背後から追い付いてきたらしい女性の叫び声がした。

「あなた自分が何したか分かってるのーー？」

「ああ、うるせー……

「商談を白紙に、と言われるのでしたらビビバ！ 勝手に

ゆっくりと振り返り、憤慨している女性に「うつと微笑んでみせ

る。

そして表情を一変させ、俺は彼女を睨み付けた。

「しかし、商談が成立しないと困るのはあなたのお父様ですよ。あなたは自分が有利だと思われてるようですが、実際、私の会社に泣きついてきたのはあなたの方です」

「なつ……なにを……」

「まだ分かりませんか？売られたのは私ではない。あなたの方です」

驚愕に目を見開く女性から視線を反らし、俺は学生一人の肩を押す。

「すまない、場所を変えよう。ちょっと付き合つてくれ」

小声で彼らに話しかけ、女性からどんどん離れていく。

「あの人いいのかよ？」

「構わないよ」

何でも思い通りになると思つていてる傲慢な金持ちの考えに付き合つ氣はそりそりない。

まだ不信感を持つていてる男の子に微笑むと、女の子が俺の服を引っ張つた。

「お兄さん、桜の彼氏？」

「「え？！」」

しつかりと歩は進めながら、女の子の指摘に男一人で驚いてしまつ。

「なんで分かつたの？」

「何となく？」

桜ちゃんの話から、どこか抜けてる天然な子だと思つてたけど。

なるほど、勘がいいのかもしね。

そしてこの後二人から俺はいろいろな話を聞くことになつた。

「なんで……なんでいるの？」

困惑する私の頭を優しく撫で、清貴さんはフッと微笑む。

息が荒いのは急いでくれたから……？

「雅ちゃんが教えてくれたんだ」

「雅……？」

清貴さんの口から飛び出した名前に眉を潜める。

雅の話を清貴さんにしたことはある。
けど雅にまじていなかつたのに。

「それって……」

「待てよ、誰だお前はー。」

唐突に背後から私の言葉を遮り、お見合い相手の男の人声を上げる。

やば……完全に忘れてた……

すると、私をグイッと抱き寄せ、清貴さんが口を開いた。

「「」の子は俺の恋人なんで、手を出さないでもらえますか?」

恋人!?

驚いて見上げると、清貴さんはにっこりと微笑んでる。けど、何か怖い……

お見合い相手も顔が引きつってる。

そして清貴さんからの止めの一言。

「いなくなるなら卑くした方がいいですよ?じゃないと殴りますから」

殴……つ!?

いつも柔和な清貴さんは想像できない激しい言葉に、ビックリしてしまつ。

そのあまりにも冷たい響きに、お見合い相手は脱兎の如く逃げ出した。

「残念……一発殴つてやりたかったのに」

そう言いながら、全然残念そうじやない清貴さん。

「清貴さん……なんで……」

「聞きたい」とはいっぱいある。

なんで雅が清貴さんを知ってるの？

なんで来てくれたの？

なんでさつき、私のこと”恋人”って言ったの？

「質問攻め？」

私を抱き締めたまま、喉の奥で笑う清貴さんを軽く睨む。

けれど全く動じてない彼は私の頭を撫でただけだった。

「雅ちゃん達には昨日、偶然会ったんだよ」

「昨日……」

脳裏に甦つた昨日見たあの光景。

それを思い出した瞬間、胸を貫く痛みに耐えきれず、私は清貴さんからそつと離れた。

「桜ちゃん?」

「……どうして私を”恋人”だなんて言ったの?」

さつき私を守るようにして囁いてくれた言葉。

嬉しかったけど、同時に空しくもなった。

だつて私は……

「言葉通りでしょ。桜ちゃんは俺の大切な……」

「嘘……」

言いかけた清貴さんを遮つて。

私は清貴さんを見上げ、悲しみと怒りを込めて睨みつける。

「私、見たの。清貴さんが女人の人と歩いてた……他にちゃんとした人がいるなら、思われ振りなことしないで!」

言いながら自然と涙が浮かんできた。

でも泣き顔なんて見せたくなくて、隠そつと俯いたけど、それは清貴さんに阻まれた。

「思われ振り? 桜ちゃんはずつと、俺が本気じゃないって思つてた

の？」

見上げた清貴さんの顔には、怒りと苛立ちの色が見えた。
その表情に何も言えなくなつた私に、清貴さんは溜め息を一つつべ
と、私の手を掴みどこかへ歩き出した。

「清貴さんつ……痛い……」

力強く私を引っ張つていいく清貴さんに抗議の声を上げるけど、力が弛むことはなかつた。

何度も転びかけるのをなんとか堪えながら、清貴さんを見上げるけど、その表情は読み取れない。

「あり……桜と、清貴くん？」

前方から聞こえた女の人の声に清貴さんの足がやつと止まる。

「」無沙汰します

にこやかに清貴さんが挨拶した相手は、ホテルのロビーで寛いでいた私の父と母だった。

二人は驚いた顔で私達を見ていたけど、それより驚いたのは私の方。

だつて清貴さんが突然、深々と頭を下げるから。

「清貴さんー？」

「桜ちゃんを……娘さんを俺にくれださい」

慌てる私達家族に構わず、清貴さんはそつそつとつとつとした口調で告

げた。

「え……？」

突然のこと私は戸惑つてしまつ。

そんな私に気が付いたのか、清貴さんが手を握つてきた。

そして顔を上げると、いつもの微笑みを私に見せる。

「ずっと考えてたんだよ。桜ちゃんが大学生になるまで待とつと思つてたけど、案外敵は多いみたいだから」

もちろん負けの気はさらさらないけどね、といつも葉とワインクのおまけ付きに何も言えなくなつてしまつた。

「で？ で？ その後どうなったの！？」

お昼休みになり、中庭の隅へと私を連行した雅は開口一番そう聞いてきた。

「雅、落ち着けって……」

さすがの雄大も呆れた様子で私から雅をひつぺがす。

朝から休み時間毎に質問攻めにあつてゐる私は、小さく溜め息をつきながらも、雅の質問に口を開いた。

「両親は驚いてたけど、清貴さんを信用はしてるから。とりあえず婚約つて形」

「……さすがお嬢」

「なんかカツコイイね！」

引きついた笑みの雄大と、満面の笑みの雅。

そんな対照的な二人を見て、私は深々と頭を下げた。

「桜……？！」

「何にも話さなくて」めんなさい

清貴さんからあの後、二人がどれだけ心配してくれていたか聞かされた。

だから会つたらまず謝るうつと思つていたけど、予想外の質問攻めでタイミングを逃してしまつていた。

「……そう簡単には許せないな」

「雄大！」

上から降つてきた雄大の冷たい声に顔を上げると、雅が咎めるように雄大の腕を掴んでいた。

けど、雄大の怒りは、もうつとも。

「「」め……」

「最初から相談すりやいいんだよ。俺達は友達なんだから」

私を遮つてそう言つた雄大を見れば、やつはにっこり笑つた。そのまま笑顔に拍子抜けしてしまつ。

「桜……桜が困つてる時、私は何とか力になりたいつていつも思つてるんだよ。そりや頼りないだろうけど……」

「違うよ、雅。違うの……」

俯く雅に私は首を振つた。

「私が言えなかつたのは怖かつたから。雅に軽蔑されるんじやない
かつて」

「え……？」

ポカン、と私を見る雅に微笑む。

私はゆつくり言葉を探しながら口を開いた。

「私の彼氏は六歳も年上で、私達からしたらずっと大人だから。そ
んな年上の人と付き合つての知つたら軽蔑されるんじやないかつ
て……」

高校生の私と社会人の清貴さんは住んでる世界が違うから。

私は純粹な雅に軽蔑されるのが怖かつたんだ。

「桜、そんな風に考えてたの？ だから彼氏の話、してくれなかつたの？」

悲しげな雅の顔。

その顔を見れば、私の考えがどれだけバカバカしかつたかが分かつた。

「じめ……」

「じめんね、桜あ……」

謝ろうとした私に何故か抱きついてきた雅に、私は慌てた。

訳がわからない私に、雅は嗚咽を漏らす。

「桜がつらい思いしたの私のせいだあ……」

「いや、だからね？」

ふええん、と泣き出す雅の頭を撫でてやりながら、私は苦笑した。

ふと雄大に視線を向けると、お手上げのポーズで返される。

そしてようやく雅が泣き止んだ頃、タイミング良く予鈴が鳴った。

放課後。帰る用意をする私に、雅が後ろから抱きついてきた。

「桜！一緒に帰ろ？」

「「」めん。今日はダメ」

巻き付いてきた腕をポンポンと叩きつつと、雅は泣きそつた顔になる。

「婚約者さんだろ」

後から来た雄大に微笑むと、雅はあつ、と私から離れる。

「そつか。だよね」

今まで内緒にしてたから、迎えに来るつて言つててくれる清貴さんの申し出は断り続けてた。

けどもうバレちゃったしね。

「雅は雄大とイチャイチャしてなさい」

「はあー」

素直に頷く雅に微笑んで、私は先に教室を出た。

校門を過ぎてしばらくすると、前方に見知った車がある。

「終わったよ

開いた窓から中を覗くと、清貴さんの笑顔が私を迎えてくれた。

清貴さんの車で向かつた先は彼の自宅マンション。

ほかほかと湯気のたつマグカップを前に、清貴さんは頬杖をついている。

「桜ちゃんは、年上の恋人つて恥ずかしい？」

「え……？」

突然の問いかけに頭がついていかなかつた。

「だつて、恥ずかしいから雅ちゃん達に俺のこと、話せなかつたん
でしょ？」

「あ……それは……」

悲しげな清貴さんの目が私を見つめる。

その視線に耐えきれず、俯きながら私は口を開いた。

「別に恥ずかしい訳じゃなくて……その……釣り合わないから……」

ずっと感じてた年齢つていう壁が私には大きすぎた。

だつて、私が休みだからつて、清貴さんも休みなわけじゃない。

雅達は私が同年代と付き合ひてると思つてるとから明日休みとかなると「彼氏と遊ぶの?」って聞いてくる。

その度に曖昧に笑つて誤魔化してきたけど。

「清貴さん」とって私は子供だし……」

そう言つて不意に思い出したあの光景。

清貴さんに寄り添うように立つ綺麗な人は、端から見てもお似合いのカップルだった。

「あの人は仕事関係の人。ちゃんと断つてきたよ

私の考えを読んだらしい清貴さんは、俯く私の側に来ると、自分の膝に私を座らせた。

「あれは桜ちゃんの可愛い焼きもちだったのかな」

耳元でクスクスと笑いながら、清貴さんは私を後ろから抱き締める。身動きができない私は、清貴さんに背を向けてこの状況に内心ホッとした。

だつてたぶん、今の私の顔は真っ赤だもの。

「……年の差はおつきいけど、俺が桜ちゃんを好きな気持ちはそんなもんには負けないよ」

耳元で切なく囁かれた一言に私は小さく頷いた。

ずっと、あなたには理解らないと思つてた。

あなたはずっと大人で、私が追いかけても決して捕まえられない。

終わらない追いかけっこ。

だから精一杯伸びをした。

けど、どんなに皆から「大人っぽい」と言われても、それであなたに近付いたわけじゃない。

それでも。

それでも、あなたを好きな気持ちは誰にも負けはしないから。

まだまだ子供な私だけど、いつかあなたの隣を堂々と歩ける女になるから。

待つてね。

【End】

最終章（後書き）

「」お読みいただき、ありがとうございます。

桜の物語、これにて終了です。

いやー 最長記録… 長つ…

しかし内容が薄い…

すみません、私の頭はこんなもんです…

拙い話ですが読んでいただきこと、感謝感謝ですー。

ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6133/>

出会えた奇跡を

2010年10月14日19時56分発行